



1. 自然の脅威から身を守る術
2. テクノロジーアセスメントを土木技術に
3. 日本列島全体の調和を

1. 先日の集中豪雨により多数の犠牲者のでたことは、まことに残念なことであり悲しいことである。雨が降ればすぐ災害とは日本の宿命とはいえ実に情けないことである。一日も早く今回の災害による各種施設、その他の復旧と災害の生じない施設の整備が要望される。ここで施設整備とは別に一寸見方を変えて、水による災害からとくに人的災害を避けることを考えてみるのが大事でなかろうか。それには、何をおいても災害の危険から住民の避難を第一に早めに行なうべきである。これは専門家としての土木技術者の義務でもあろう。しかも、今日ではかなりの確実さをもって危険を予知できるはずであるからなおさらである。現在の姿はどうも一歩遅れているような気がするのだがいかがであろうか。第二には、これも当然のことながら被災者の救済である。これは現在自衛隊が一手に引き受けているようで、土木屋はどうも後手に回っているように思われる。もちろん、これはある程度やむを得ないことでもあろうが、何とかその道の専門家として輸送手段の確保などの早期態勢を整えて欲しいものである。そのためには、情報の早期収集とあわせてヘリコプターなどの具備をもすべきである。よく自然を制するといわれるが、そのような驕ったことでなく、自然の脅威から身を守る術を備えることを civil engineer に望みたいものである。 [J]

2. 都会では最近季節がなくなってきたように思われる。四季おりおりの草花、鳥の声、虫の音……などがわれわれの周囲から消え去ったのはまだ記憶に新しい。かわって排気ガス、騒音、大気汚染、水質汚濁等の環境破壊がすさまじい速度で進みつつある現状を考えると、科学技術のあり方について再検討する必要があるように思われる。

本来科学技術は人類の福祉と社会の発展に貢献するものであるが、技術が大型化・高度化するに伴い、従来無視されてきた技術の副次的マイナス効果が顕在化するようになった。

このような科学技術のもたらすマイナス効果も、総合的に把握することによって、技術開発に伴う弊害を事前にチェックするテクノロジーアセスメント（技術の総合評価）の手法を開発することが要請されている。

当初アメリカ合衆国において開発の要が唱えられたこの手法は、日本においても科学技術庁、通商産業省などでケーススタディが開始されているが、いまだ研究の域を出ていない。

国民生活に密接な関連を有する公共資本の整備の基礎となる土木技術の分野においても、その技術の大型化・システム化が要請されている一方で、公害防止、環境の保全等の社会的な要請が生じてきている昨今、テクノロジーアセスメントの手法の開発を早急に推進させる必要があるのではなかろうか。 [S]

3. 全国各地に大きな被害をもたらした先月の集中豪雨による災害の発生状況を見ると、道路、鉄道とか、住宅等の建設のために大なり小なり人為的に自然の改造を行なったところに発生している。建設時には当然ながら統計的に推定した降雨量なり洪水流量に対応した防災処置を行ない安全対策を講じてあったものと思われるが、現実理想量を上回ったために災害が発生したものと考えられる。

近年、とくにかかる災害が発生するたびに自然保護か、開発かが大きな社会問題となる。今後の国土開発には、自然保護と開発が調和のとれたもので自然破壊に対する防災措置は万全を期することはいうに及ばないが、従来はともすれば一地域内の調和に重点が置かれていた傾向が強く、必ずしも日本列島全体の調和を十分に考慮していたとは思われない風潮を反省したい。

宇宙から地球の表面を観測し、地上の環境問題や防災、資源管理のあり方に役立てようとする目的で7月23日にアメリカ合衆国で資源衛星が打上げられた。この衛星の観測には大きな期待が持たれている。

幸に、撮影された写真は NASA を通じてわが国にも送られるとのことである。この衛星の観測結果を活用して自然保護と開発の調和も宇宙から見た調和のとれた姿にしてほしいものである。 [C]